

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

今、対話とは何かと考えると、どのように説明できるでしょうか。

とても簡単にいえば、「相手と話すこと」ということになるでしょうか。

しかし、一方的に相手に話しかけても、その相手がこちらの言っていることに①耳をかたむけてくれるかどうかは、だれも②ホシヨウできません。

相手の目をしっかりと見て、きちんと語りかけること、世間の話し方講座ではこんなアドバイスがあるかもしれませんが、そのとき、しばしば出るのは、「思ったことを感じるままに話してはダメだ」という意見ですね。思ったことを感じるままに話すと、おたがいに感情的になってしまい、解決すべきことがなかなかうまく運ばない等々。

しかし、「思ったことを感じるままに話す」ことそれ自体が悪いことだとは、わたしは③思いません。④「思ったことを感じるままに話すべき」であるとさえ思うほどです。

⑤ 一つ、思ったことを感じるままに話すと、それがおしゃべりになってしまおうという大きな課題があります。

⑥ ここでいう「おしゃべり」とは、相手に話しているように見えながら、実際は、相手のことを考えない活動だからです。少しむずかしくいうと、他者不在の言語活動なのです。

でも、相手があつて話をしているのだから、他者不在とはいえないのではないかという質問も出そうですね。

⑦、おしゃべりをしているときは、相手に向かつて話しかけてはいますが、ほとんどの場合、何らかの答えや返事を求めて話しているのではなく、ただ自分の知っている情報をひとりよがり話しているだけではないでしょうか。そこでは、他者としての相手の存在をほぼ無視してしゃべっているわけです。だからこそ、思ったことを感じるままに話すことには注意が必要なのです。

「あのことが、うれしい、悲しい、好きだ、きらいだ」というように、自分の感覚や感情をそのままことばにして話していても、相手は、「へえー、そうですか」とあいづちを打つだけ。今度は相手も語りはじめ、それぞれに感じていることや思っていることを

はき出すと、おたがいなんだかすつきりして、なんとなく満足する。こういうストレス<sup>⑧</sup>ハツサン<sup>⑨</sup>の点では、おしゃべりもそれなりのコウカを持っています。その次の段階にはなかなか進めません。

このように、いわゆるおしゃべりの多くは、かなり自己完結的な世界の話ですから、そのままでは、それ以上の発展性がないのです。その意味では、おしゃべりは、相手に向かって話しているように見えても、実際は、モノログ（ひとりごと）に近いわけでしょう。表面的には、ある程度、やりとりは進むように見えますが、それは、対話として成立しません。ここにモノログであるおしゃべりとダイアログとしての対話の大きなちがいがあります。

ちよつと<sup>⑩</sup>ヨダン<sup>⑪</sup>になります。カルチャーセンターの講演会や大学の講義などでも、こうしたモノログはよく見られます。本来、聴衆や学生に語りかけているはずのだけれど、実際は、自分のカンシンジ<sup>⑫</sup>だけを自己満足的に<sup>注1</sup>とうとうと話している、これはまさにモノログの世界ですね。

これに対して、ダイアログとしての対話は、常に他者としての相手を想定したもののなのです。自分の言っていることが相手に伝わるか、伝わらないか、どうすれば伝わるか、なぜ伝わらないのか、そうしたことを常に考えつづけ、相手に伝えるための最大限の努力をする、その手続きのプロセスが対話にはあります。

対話成立のポイントはむしろ、話題に関する他者の存在の有無<sup>⑬</sup>ではないかと私は考えます。実際のやりとりに他者がいるかどうかだけではなく、話題そのものについても「他者がいる話題」と「いない話題」があるということなのです。つまり、その話題は、他者にとってどのような意味を持つかということが対話の進展には重要だということです。

したがって、ダイアログとしての対話行為は、モノログのおしゃべりをこえて、他者存在としての相手の領域に大きくふみこむ行為なのです。

言いかえれば、一つ的话题をめぐって異なる立場の他者に納得<sup>⑭</sup>してもらうために語るといふ行為だともいえますし、ことばによって他者をうながし交渉<sup>⑮</sup>を重ねながら少しずつ前に進むという行為、すなわち、人間ならだれにでも日常の生活や仕事で必要な相互関係構築<sup>⑯</sup>のためには活動だといえるでしょう。

では、このような⑫ダイアログとしての対話によって人は何を達成することができるのでしょうか。あるいは、今、対話について考えることは、わたしたちにとってどのような意味を持つのでしょうか。

まずあなたは対話ということばの活動によって相手との人間関係をつくっています。

その人間関係は、あなたと相手の二人だけの関係ではなく、それぞれの背負っている背景とつながっています。

その背景は、それぞれがかかわっている注2 コミュニティと深い関係があります。

相手との対話は、他者としての異なる価値観を受け止めることと同時に、コミュニティとしての社会の複数性、複雑さをともに引き受けることにつながります。

だからこそ、このような対話の活動によって、人は社会の中で、他者とともに生きることを学ぶのです。

このように、対話は、個人と個人が何かの話題について話し合うことだけではなく、それぞれの個人がことばを使って自由に活動できる社会の形成へという可能性にもつながっていきます。なぜなら、ことばを使って自分の考えていることを他者に伝えるという行為は自分自身の個人的な私的領域から他者という未知の存在へ働きかける公的領域への行為だからです。

あなたにとつての対話という活動は、あなた自身がことばを使って自由に活動できる社会の形成のための重要なカギになるといえるでしょう。

『対話をデザインする』細川英雄

注1 とうとうと・・・すらすらとよどみなく話すようす。

注2 コミュニティ・・・共同社会。

問一 — 部①「耳をかたむけてくれる」の意味として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 相談にのってくれる      イ 感動してくれる      ウ 少し関心をもってくれる

エ 注意して聞いてくれる      オ 聞いているふりをしてくれる

問二 — 部②・⑧・⑨・⑩・⑪のカタカナを漢字に直しなさい。

問三 部③・④・⑤・⑦に当てはまる言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 決して    イ さらに    ウ ただ    エ たしかに    オ たぶん    カ むしろ

問四 — 部⑥「ここだという『おしゃべり』とは、相手に話しているように見えながら、実際は、相手のことを考えない活動だからです。少しむずかしくいうと、他者不在の言語活動なのです」とありますが、筆者は「おしゃべり」についてなぜこのように言っているのですか。解答らんに合うように、文中の言葉を使って六十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

おしゃべりは、

問五 文中の\*部分(「これに対して、」から文章の最後まで)を内容から三つに分けるとすると、どこで分けますか。二つ目と三つ目の段落の最初の五字をそれぞれぬき出しなさい。(句読点は字数に入れます。)

問六 ダイアログとしての対話が成立するためには、ということが大切だと筆者は言っていますか。二十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問七 ダイアログとしての対話行為は、どのような働きをする活動だと筆者は言っていますか。文中から十六字でぬき出しなさい。(句読点は字数に入れます。)

問八 — 部⑫「ダイアログとしての対話によって人は何を得ることができるのでしょうか」とありますが、この問いに対する答えを解答らんにあうように文中の言葉を使って九十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

ダイアログとしての対話によって、ことができるということ。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部をかえています。)

〈中学一年生の学と憲太は、全校生徒が五人だけの生田羽中学校分校(本校とは別に、離れた土地につくられた小さな学校)に通っている。〉

学がべそをかく顔なんて、いつぶりに見ただろうか？ 見たとしたらたぶん、小学校に上がる前だ。学と聞いて憲太が頭に浮かべる彼の表情は、最近では暗記カードや教科書などをにらみつけるようにしているものと、いかにも頭脳明晰そうにまっすぐ前を見つめる横顔、それから、こちらを振り向いて①シンソコ嬉しげに笑う顔——それらだ。

いやそれよりも、なぜ、涙ぐんでいるんだろう。

「おい……おまえ」

「わかるわけないよ……憲太は、両親もおじいさんもおばあさんも、ずっとこの村じゃないか。でも僕は違う。親が勝手に……田舎にへんな夢抱いて、こんな村に来て」

村おこしの一環として、十数年前に農地を無償で貸し出すと都会から若夫婦を誘致したのは、憲太の祖父の②サクだった。

「うちの親がそのまま都会にいてくれたら、僕の今はきつと違ってた。こんな村じゃ、十分な勉強なんてできない。札幌や大きな街の子は、なんの苦労もなく進学塾や予備校に通っている。ネットの授業配信も、もう少し先だっていうし」

泣きべその理由を推しはかりながら、憲太は学をとりあえず励ましてみた。

「③でもおまえ、今でも十分すいじじゃん」

「どこがだよ！」

大声を出した学の頬を伝い、細い顎の先からしずくが落ちる。「成績は下がったんだよ、僕は僕なりにやったつもりだったのに……僕より上のやつらは、みんな都会の子だった。彼らと同じことをやれたら、絶対負けなかったのに」

学は顎を手の甲で拭いながら、進学塾のテキストを拾い上げた。

「環境が違うんだ、勉強する環境が……こんな田舎にいるって、それだけですごいハンデだ。このままなら、きっとこれからもどんどん成績は下がる。成績が下がれば、望む高校に行けないかもしれない、大学にだって」

そして、苦しげに絞り出すような声で、こう断じた。

「真つ暗だ。④生田羽村が、僕の未来を閉ざすんだ」

ああそうか——憲太は⑤腑に落ちた——こいつは悔しいんだ。悔しくて泣いているんだ。自分ではどうにもならないことが自分を邪魔していると信じ込んで。

眼鏡を外して肘をつき、両手で顔を覆って、学はどうとう嗚咽しだした。憲太は暗さにまぎれてしまいそうな彼のつむじを、しばらくにらんだ。

「……だっせ。めそめそしやがって」

口から出た声は、憲太自身も驚くほどに低かった。

「おまえの未来って、なんだよ」

その低さで、内にくすぶる怒りを憲太は自覚した。学も⑥イヘンを悟ったのか顔を上げた。

「⑦どんな未来がお望みなんだよ、言ってみるよ、おい」

そういうえば、学の将来の夢を憲太は知らないのだった。憲太も教えていなかった。というか、真面目に考えたことがなかった。学校でそういった課題の作文を書かされたこともなかった。

学の未来については、村の大人たちが口々に好き勝手なことを語るのを耳にするだけだった。

「……医師」

学も低い声で一言答えた。

「は？ イシ？」

「医師。お医者さんだよ、久松先生みたいな」

子どものころから世話になっている、穏やかで優しそうなおじいさん先生の像が、憲太の頭の中で結ばれた。また雷が連続して落ちた。学の喉が、ひゅつと鳴った。

なるほど、医者なら難しいだろう。難しくなければ困る。人の命を預かる仕事なのだから。でも。

「俺、今のおまえみたいなお医者さんなら、診てほしくない。ほんとマジ、絶対やだね」

雷が落ちたみたいに、学の体がびくつとなった。憲太はたたみかけた。「だって今のおまえなら、<sup>⑧</sup>シュジュツ失敗しても、器具が悪かったとか、とにかく上手くいかなかったら周りのせいにしてそうじゃん」

「なんだって？」

学が眉を上げ上げて席を立ち、上目遣いで注<sup>1</sup>ねめつけてきたが、憲太は動じなかった。

「おまえ、さっき言ったこと忘れたのかよ？ 自分の成績が落ちたのを生田羽村のせいにしてた。こんな田舎だから駄目なんだってさ」

右手が勝手に動いて、向かい合う学の肩をつかんでいた。

「バツカじゃねえの？ 久松先生だってこの村の出身だぞ。そりゃたしかにここは田舎だよ。でも、それだけの理由でおまえが駄目になるなら、それはおまえがその程度だったただだよ。全世界のお医者さんは一人残らず都会出身なのかよ？ 違うだろ？ 本当にすごいやつは、⑨」

「でも」

学が反論しかけた矢先、落雷があった。手の中にある彼の肩が強張るのがわかった。憲太はまた窓の外を見てしまった。空が明るくなることに、一面を覆う雷雲の形が、黒とぐん青と紫を混ぜたような色で浮かび上がる。

「でも……僕のことをすごいと言ったのは、僕じゃない。大人たちや、憲太だよ」

憲太の手首が、そっと学の右手で押しつけられた。冷たい手だった。

「大人にはなんと噂うわさされてもよかったけど、憲太が言ってくれたのは嬉しかった。だから」

ずっと、誰よりすぐくあり続けなくてはいけないと思った——学は打ちひしがれたみたいになされた。

「あ……僕、憲太のせいにしたね」

学はもう泣き声をたてなかった。ただ、両手で顔を拭い続けた。雷が夜を走るたびに、唇くちびるを噛みしめ、目の下や頬に指や手の甲を押し当てる青白い顔が見えた。憲太はだんだんと不思議な気分になった。学はクラスの中でははっきりと大人っぽい部類に入る。本校の生徒を含めてもそうだし、実際に目にしたわけではないけれど、札幌の進学塾のクラスでだって、<sup>⑩</sup>グンを抜ぬいて冷静で落ち着きはら払った雰囲気ふんいきだっただろう。けれども今、自分の前にいる学は、まるで子どもだった。雷に怯おびえて目を閉じ、耳をふさいでいた、遠い日のように。

そうか、嬉しかったのか。俺の言葉が。

もう何度目かわからない稲光いなびかりと轟音ごうおんが襲おそう。雷が光るたびに、幼かったころの学が今の学と重なり、<sup>⑪</sup>さつきまでの腹立ちほどこへやら、憲太は自分でもわけがわからぬまま、笑っていた。

「俺さ、おまえのことすごいって言ったけどさ、別におまえが勉強すごいから友達なんじゃないよ」

学の手が止まる。憲太は続けた。

「俺は学が神童だから好きなんじゃない。おまえがブサイクでも頭悪くても、おまえがおまえならそれでいいんだ」

「憲太……」

「テストの成績がすごいと思ったのは嘘じゃないよ。学が褒ほめられるのもすげえ嬉しい。でも俺、おまえの本当にすごいところ、別にあるのを知ってる」

「え？」

「春休みさ、おまえいなかっただろ？ だから俺、<sup>注2</sup>ビートの間引き作業、一人で手伝わされたんだよな」

稲妻いなづまについての言葉を切り、窓の外へと目をやった憲太を、学が遠慮えんりよがちに急せかした。

「……間引き作業がどうかしたの？」

「ああ、それな。あのさあ、間引き作業ってすげえ面倒めんどうくさくてつまんねえの。おまえ、知ってた？」

「まあ、地味で遅々ちぢぢとして進まない作業っていうよね。うちの親は好きじゃないって言った」

「だろ？ おまえは？」

「僕は別に好きでも嫌いでもない」

「俺もそうだった。でも俺さ、今年初めて、うわ、この作業つまんねえって気づいたんだよ。それまでは間引き作業を嫌いじゃないと思ってた。うんざりなんてしなかったからさ。でも、本当は嫌いだったみたいなんだ」

学は頷うなずいた。「それで？」

「でさ、なんで今まで毎年やってきて、嫌いだった気づかなかったのかなって考えてみてさ、俺わかったんだよ」  
憲太は学の胸元を人差し指で軽く押した。「去年まで、おまえと一緒にやってたからだって」

⑫虚まよを突つかれたような学の表情が、稲光に照らされる。その光の力を借りて、憲太は学の目をのぞき込む。

「そうだよ、隣となりにおまえが、学がいたから、『嫌い』や『つまんねえ』がごまかされていたんだ。おまえと一緒にいっしょにやったから、あの間引き作業もそれなりに楽しかったんだ」

ただでさえ停電中のうえ、裸眼らがんの学は視界がうまくとらえにくいのか、目を凝こらすようにじっと憲太を見返してくる。

「僕も、嫌いだと思っただけじゃない……」

「来年おまえ、一人でやってみるよ。びっくりするほど時間経たねーから。あ、来年もおまえ札幌行くのか？」

学は特になにも答えなかった。構かまわなかった。憲太は心の内をそのまま言葉にした。

「とにかく俺、思ったんだ。友達ってすげえんだなあ、って」

嫌いだったりつまらなかったりする時間も、一緒にいさえすれば、乗り切れる。

楽しみすら、見出せるかもしれない。

そういう力を持つ、自分にとってたった一人の相手。

「おまえが本当にすごいのは、そういうところだよ」

⑬ 字は静かに顔を伏せた。

『願いながら、祈りながら』 乾ルカ)

注 1 ねめつけてきた・・・にらみつけてきた。

注 2 ビート・・・さとうだいこんのこと。

問一 —— 部①・②・⑥・⑧・⑩のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 —— 部③ 「でもおまえ、今でも十分すごいじゃん」とありますが、憲太は学のどういうところを「すごい」と言っているのですか。十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問三 —— 部④ 「生田羽村が、僕の未来を閉ざすんだ」とありますが、「生田羽村が、僕の未来を閉ざす」とはどういうことですか。文中の言葉を使って、四十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問四 —— 部⑤ 「腑に落ちた」の意味として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 満足した    イ 発見した    ウ 感心した    エ 理解した    オ 失望した

問五 —— 部⑦ 「どんな未来がお望みなんだよ」とありますが、学はどのような未来を望んでいるのですか。文中の言葉を使って、二十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問六

部⑨に当てはまる最も適当な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア なにを聞いてもあわてたりしない

イ どこにいたってちゃんとやれる

ウ 周りにどう思われても気にしない

エ だれの気持ちだつてわかるうとする

オ どんなときでも自慢じまんなんかしない

問七

部⑪「さつきまでの腹立ち」とありますが、憲太は学のだのようなところに腹を立てていたのですか。文中の言葉を使って、三十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問八

部⑫「虚を突かれた」と同じ意味を表すことわざを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 寝耳ねみみに水    イ 手も足も出ない    ウ 泣きなつ面に蜂はち    エ 目から鼻へ抜ける    オ 二階から目薬

問九

部⑬「学は静かに顔を伏せた」とありますが、学はこのときどのような気持ちでいたと考えられますか。そう考えられる理由もあわせて、六十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)